

短かった夏休みのせいも、子供たちはすぐに2学期の学校生活に慣れ、元気に活動している。1年生は「虫取り」に夢中で、休み時間も生活科の授業中も「捕虫網」をもって、校庭の草場を走り回っている。大きなバッタやコオロギを捕まえては、見せに来てくれる。

今年はプールに入れなかったのも、各学年で「水遊び大会」が開かれているようで、水鉄砲やバケツで水の掛け合いをしている。全身びしょ濡れになっての大騒ぎであるが、残暑の厳しいなか、少しでも夏らしい活動ができたのはよかったかな、と思う。

高学年は本日出発した「蔵王自然の家での合宿」や23日～24日に予定されている「修学旅行」で思い出を作ってくるだろう。コロナ禍の様々な制限がある中で、行事の実施にあたっては本当に多くの方々にお世話になっている。子供たちには「当たり前前のご事情が、当たり前前にできること」への感謝の気持ちを持てるように指導したい。

さて、令和2年度も折り返しとなり、私たちは来年度の教育課程、学校行事のあり方について検討を始めている。**子供のために本当に必要なことは何か？**を徹底的に絞り込まない限り、大きく広げてきた学校行事の廃止や削減と、子供の新しい学力（資質・能力）そして教員の働き方改革は並立しない。

コロナ禍は学校に求められる本当の使命を残酷に、そして鮮やかにあぶりだしていると感じる。

キーワードは「**最善か？無か？**」である。